



隣村との境から見渡した鮭川村。川を中心に山々に囲まれている。

もダメ、遅いと朽ちてしまう。わずか3日間しか出ていないキノコもあるほどだ。本当に良い時期は1年に5日ほどしかないのだ。この季節になると気が気でないのだ。去年はここにムラサキンメジがあったのにな……。これはなんだろう、ポルチーニの仲間かな……。キノコを見つけると、正人さんはサッとしゃがみこんだ。ポケットに入れていたビニール袋を引っぱり出し、しげしげと眺めながらキノコを入れる。新しいキノコを見つけて培養し、会社の新商品として売り出せれば……。と始めたキノコ狩り。今ではそれは本音半分、建前半分だ。「人間の作っているキノコなんてキノコの世界からすればごく一部。とにかくキノコのことを知りたい。この仕事をしたい、ただ食べるだけ、生きるためだけだとつまらないでしょ？」と笑う。3時間ほどじっくり山を歩き回る。今日の成果はなかなかだ……。こうして正人さんが20年以上、鮭川村の山を歩いて見つけてきたキノコは50種類を超え

る。山伏茸もその一つである。お子様  
奥羽山脈と出羽山地に囲まれた鮭川村は県内屈指の豪雪地帯である。雪に閉ざされる冬場、農家は仕事がなく出稼ぎに行くしかなかった。同級生がみんな関東の鉄工所や工場へ出稼ぎに行く中、荒木家は所有する山林の木を切って収入の足しにしたので正人さんだけは何んとか行かずにすんだ。戦後、食糧増産という国の号令に従い、荒木家は隣村へ続く雑木林を切り開いた。しかし開田が終わらないうちに風向きは変わってしまう。化学肥料の投入やパン食の普及によってコメが余り始め、コメの生産調整が始まったのである。  
1972(昭和47)年、裸山にしてはおけないと正人さんは桑の木を植えて養蚕を始めた。「お子様」が食べるんだよ、とにかく！雨が降るみたいなきな音を立てて食べる」。大きな財をもたらす蚕は農



1.「最上まいたけ」社長の荒木正人さん(70)と、営業部長の賢人さん(41)。2.収穫期を迎えた舞茸はコンベアの上を流されていく。カタカタと頭を揺らすように進む姿が愛らしい。3.最上まいたけの椎茸ハウスで。軸の太い立派な椎茸が出ている。

田んぼの緑が揺れ、村の中心を流れる鮭川の川面が晩夏の日差しに輝く8月末。「最上まいたけ」の社長・荒木正人(まさもと)さん(70)は、落ち着かない様子で窓に映る山を見つめていた。「そろそろだ」。まとまった雨が降り、ここ数日は晴れの日が続いている。たつぷりと雨水を蓄えた土がふっくらと盛り上がり、山がいい面構えになってきた。事務所では今日も慌ただしく注文の電話が鳴り、奥の工場では収穫されたキノコが次々と搬出されていく。キビキビと動き回る従業員たちを尻目に、正人さんはこそこそと事務所を抜け出した。なんとなく遊びに行くような罪悪感があるのだという。

#### 背徳のキノコ狩り

鮭川村はキノコの里である。盆地で湿度が多い気候はキノコの発生に適しており、秋が近づくと多種多様なキノコが顔を出す。キノコ狩りはタイミンクが命だ。早すぎて